



早稲田の女子学生 今昔物語

早稲田大学歴史館春季企画展

since 1921

1930

1940

1950

1960

1970

1980

1990

2000

早稲田大学歴史館春季企画展

早稲田の女子学生—今昔物語 since 1921—

会 期：2022年4月23日(土)～6月5日(日)

会 場：早稲田大学歴史館 企画展示ルーム

開館時間：10:00～17:00

早稲田大学歴史館春季企画展
早稲田の女子学生
—今昔物語 since 1921—

はじめに

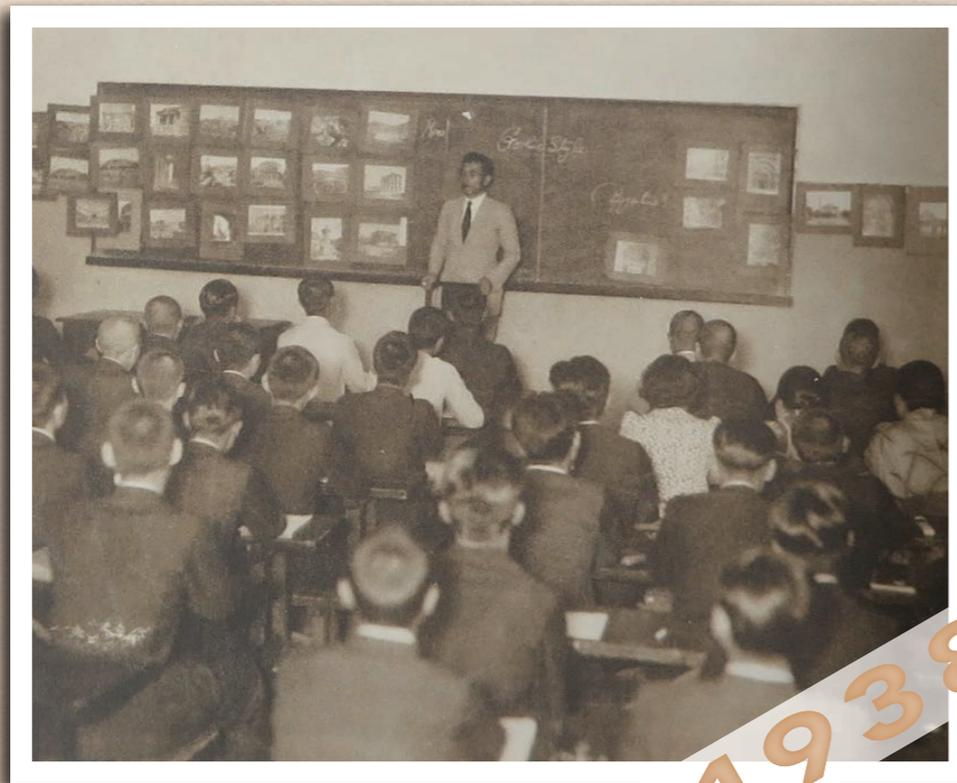
今から約100年前の1921年、早稲田大学は初めて女性の聴講生を受け入れました。その頃は男女で教育制度が異なり、女性に門戸を開く大学はごく少数であった時代でした。1939年には、女性を学部の正規学生として受け入れ、今日に至るまで多数の卒業生を輩出してきました。

近年、女性を取り巻く状況は改善されつつありますが、男女格差が無くなったとはいえません。大学進学率をとってみても、短期大学まで含めれば女性のほうがやや高いですが、四年制大学に限定すればまだ女性のほうが低い状況が続いています。現在と比べて教育制度や大学側の受け入れ体制が整わない中、早稲田大学に進学した女子学生たちは、様々な困難を乗り越えて勉学に勤しみました。そのような女子学生たちの姿を描き出すことによって、今も様々な困難を抱えている人たちへのエンパワーメントになればと思い、この展覧会を企画しました。

本展覧会では、エピソードや写真、統計データを用いながら、100年前から現在までの各時期の、早稲田の女子学生と彼女たちを取り巻く状況に焦点をあてていきます。

2022年 4月

早稲田大学歴史館



早稲田工手学校建築科 第五十二回卒業写真記念帖(1938年)

1938

関連年表 1

| 西暦 | 和暦 | 月 | 事項 (太字は早稲田大学関連) |
|------|------|-----|--|
| 1872 | 明治 5 | 9 | 「学制」発布 |
| 1879 | 明治12 | 9 | 「教育令」公布 |
| 1882 | 明治15 | 10 | 東京専門学校開校 |
| 1886 | 明治19 | 3~4 | 「帝国大学令」「師範学校令」「小学校令」「中学校令」公布 |
| 1894 | 明治27 | 6 | 「高等学校令」公布 |
| 1899 | 明治32 | 2 | 「実業学校令」「高等女学校令」公布 |
| 1900 | 明治33 | 9 | 女子英学塾開校 |
| 1900 | 〃 | 12 | 東京女医学校開校 |
| 1901 | 明治34 | 4 | 日本女子大学校・私立女子美術学校開校 |
| 1902 | 明治35 | 9 | 文部大臣、早稲田大学への改称を認可 |
| 1903 | 明治36 | 3 | 「専門学校令」公布 |
| 1904 | 明治37 | 4 | 「専門学校令」による大学となる |
| 1907 | 明治40 | 4 | 総長・学長を新設して、大隈重信が初代総長、高田早苗が初代学長に就任する |
| 1911 | 明治44 | 3 | 早稲田工手学校開校 |
| 1913 | 大正 2 | 8 | 東北帝国大学、女子学生3人の入学を認める |
| 1913 | 〃 | 10 | 成瀬仁蔵・高田早苗・渋沢栄一、「女子高等教育に関する建議」を教育調査会に提出 |
| 1915 | 大正 4 | 8 | 高田早苗学長辞任、第2次大隈内閣の文部大臣に就任 天野為之、第2代学長就任 |
| 1915 | 〃 | 9 | 高田早苗文相、女性の大学入学資格を盛り込んだ「大学令要項」を教育調査会に諮詢 |
| 1916 | 大正 5 | 10 | 第2次大隈内閣総辞職 |
| 1918 | 大正 7 | 4 | 東京女子大学開校 |
| 1918 | 〃 | 10 | 平沼淑郎第3代学長就任 |
| 1918 | 〃 | 12 | 「大学令」公布 |

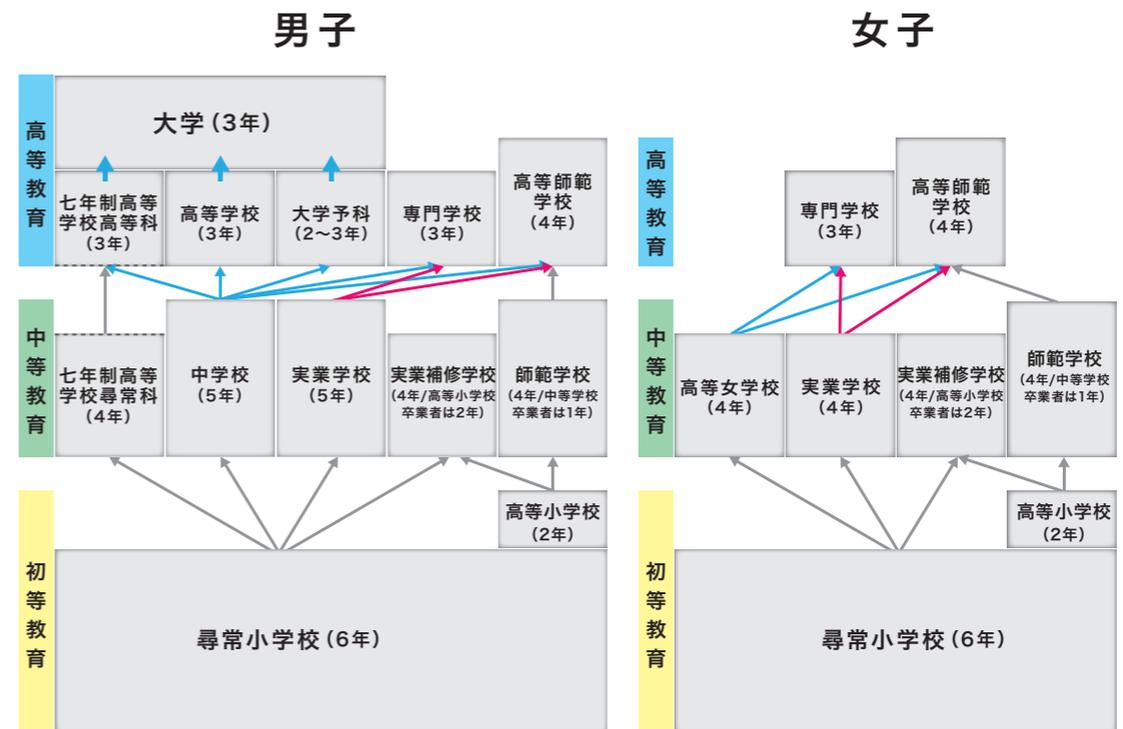
1. 男女別の教育制度と女子学生への門戸開放論

戦前の教育制度

戦前の教育制度は現在のように男女同一のものではなく、進学できる学校や修業年限に大きな差があった。下の図は1920(大正9)年の学校体系を男女別に表したものである。初等教育段階では男女とも同じであるが、中等教育以降、女子が進学できる学校の種類は減っていき、高等教育段階では専門学校と高等師範学校しかないことがわかる。

この頃、すでに女子英学塾(津田塾大学の前身)や日本女子大学校、東京女子大学など、女子のための高等教育機関が存在したが、それらはすべて専門学校の扱いであった。大学やそれに連なる高等学校や大学予科への進学は、原則として女子には認められていなかったのである。

学校体系図(1920年)



女子学生への門戸開放論

1913(大正2)年8月、東北帝国大学(東北大学の前身)に女性3人の入学が認められた。これは一回限りの例外的な措置であり、その後続くことはなかったが、これを契機に大学の女性への門戸開放論が活発化していった。

当時の新聞の論調としては、全体的に女子大学生の誕生を歓迎する論が多く、女子の大学入学を制度的に認めない文部省の政策に批判的な論調も少なくなかった。女子教育関係者の受け止め方としては、共立女子職業学校(共立女子大学の前身)の創設者の一人である鳩山春子は「日本文明の一大進歩」と述べ、日本女子大学校長の成瀬仁蔵は、女性の能力が「決して男子の劣らぬ」ことを証明したと述べ、歓迎する意見が多くみられた。

こうした世論を背景に、1913年10月、文部大臣の諮問機関である教育調査会では、成瀬仁蔵・高田早苗・渋沢栄一の3委員が「女子高等教育に関する建議案」を提出した。同案には、女子大学を制度的に認めること、女子専門学校を拡充することなどが記されていた。また、1915年8月に高田が第2次大隈内閣の文部大臣に就任すると、同年9月に女性の大学入学を制度的に認める「大学令要項」を教育調査会に諮問した。しかしいずれも審議未了で、制度化されることはなかった。



第2次大隈内閣閣僚(前列右から5人目が大隈、左から3人目が高田)

早稲田関係者の女子教育論

早稲田関係者の中には、女性に大学教育を開放するべきだと述べる者も少なくなかった。以下、その代表的なものを紹介する。



大隈重信(1916年頃)

早稲田大学創立者・初代総長。日本女子大学校創立にあたって創立委員長を務めた。

「男女複本位論」を展開し、「今日は男女複本位でなければ、社会の進歩、文化の向上を望むことが出来ない」、「今後は女子にも、進んで高等教育を与へ、真に四千万の力を正当に伸びさせ」ねばならないと述べた。



高田早苗(1907年頃)

早稲田大学初代学長。第2次大隈重信内閣の文部大臣を務めた。

学長時代の欧米視察旅行の経験から、「女子教育の方針宜しきを得ると否とは国家盛衰の根本問題である」(『婦人公論』1916年2月)との認識を持ち、文相時代は女性への大学教育の開放と、女子大学の制度化に取り組んだ。



平沼淑郎

早稲田大学第3代学長。「大学令」による早稲田大学の大学昇格に向けて尽力した。

1919(大正8)年、『教育時論』誌上に「女子の高等教育と大学開放問題」を寄稿し、「女子をして高等の教育を受けしむる機会を作り出すことは、国運の発展上、尤も喫緊の事と思考して居る」と述べた。

2. 女子学生の受け入れ（1920～30年代）

関連年表 2

| 西暦 | 和暦 | 月 | 事項（太字は早稲田大学関連） |
|------|------|----|--------------------------------|
| 1920 | 大正 9 | 2 | 「大学令」による早稲田大学、文部大臣の認可を受ける |
| 1921 | 大正10 | 3 | 「聴講生規程」が文部大臣の認可を得て、女性にも門戸が開かれる |
| 1921 | 〃 | 4 | 文学部・商学部・理工学部初の女子聴講生12名が入学 |
| 1922 | 大正11 | 1 | 帝国教育会、女子高等教育振興運動を開始 |
| 1922 | 〃 | 4 | 『早稲田高等女学講義』創刊 |
| 1923 | 大正12 | 4 | 東北帝国大学・同志社大学、正規学生として女性に門戸開放 |
| 1925 | 大正14 | 4 | 九州帝国大学、正規学生として女性に門戸開放 |
| 1926 | 大正15 | 9 | 早稲田工手学校初の女子生徒が2名入学 |
| 1928 | 昭和 3 | 4 | 龍谷大学、正規学生として女性に門戸開放 |
| 1929 | 昭和 4 | 4 | 東京文理科大学・広島文理科大学、正規学生として女性に門戸開放 |
| 1932 | 昭和 7 | 4 | 明治大学、正規学生として女性に門戸開放 |
| 1933 | 昭和 8 | 4 | 東洋大学、正規学生として女性に門戸開放 |
| 1934 | 昭和 9 | 4 | 法政大学、正規学生として女性に門戸開放 |
| 1935 | 昭和10 | 4 | 大阪帝国大学、正規学生として女性に門戸開放 |
| 1938 | 昭和13 | 4 | 関西学院大学、正規学生として女性に門戸開放 |
| 1939 | 昭和14 | 4 | 早稲田大学、正規学生として女性に門戸開放 |
| 1940 | 昭和15 | 9 | 教育審議会、女子大学の制度化を答申 |
| 1941 | 昭和16 | 12 | アジア・太平洋戦争開戦 |
| 1942 | 昭和17 | 4 | 名古屋帝国大学、正規学生として女性に門戸開放 |
| 1943 | 昭和18 | 10 | 「在学徴集延期臨時特例」公布により、学徒出陣始まる |

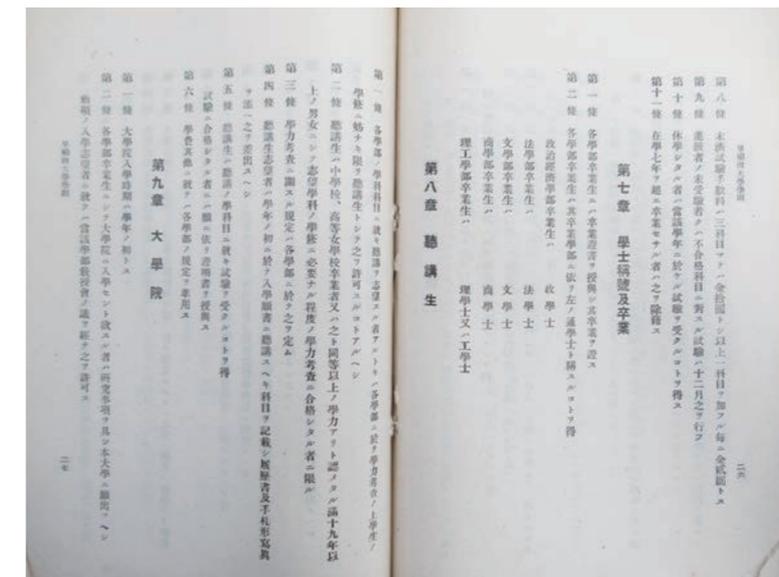
女子聴講生の受け入れ

1920年2月、早稲田大学は「大学令」による認可を受けた。それまでは「大学」と名乗ってはいても法制上は専門学校扱いであったのが、正式に大学として認められたのである。

この年の春、文学部には30人ほどの女性の入学志願者がいたという。しかしながら、女性の大学入学は制度的に認められていなかったため、聴講生として女子学生を受け入れられるよう、文部省の許可を仰いだ。その結果、翌21年には女性の入学資格を明記した「聴講生規程」が文部大臣の認可を得て、全学部で女子聴講生を受け入れることとなった。

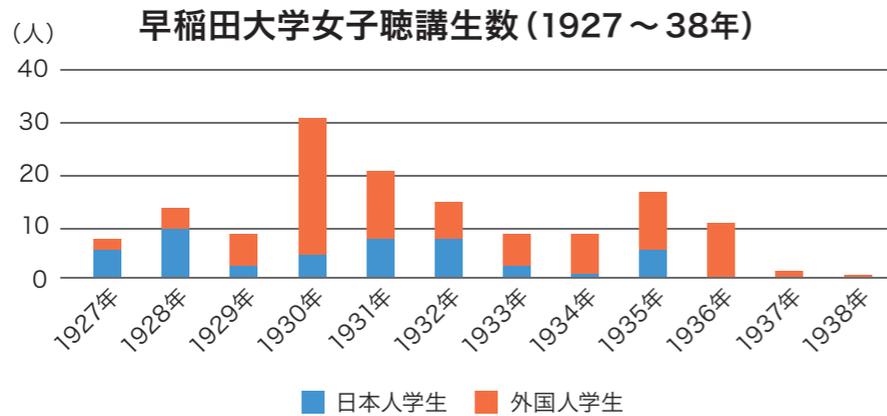
21年4月、文学部・商学部・理工学部計12名の女子聴講生が入学した。聴講生には単位もつかず卒業資格も得られなかったが、それでも大学での学びを求めて女性たちは入学してきた。文部省の統計が残っている1927年以降では、最大で31名の女子聴講生が在籍しており、中国などからの外国人学生の割合も高かった。

正規の学生ではないものの、女性の大学での学習機会を認めたことは大きな進歩であった。しかし、受け入れ体制の不備や大学予備教育の不足から、女子聴講生たちの間からは不満の声もあがった。



『早稲田大学学則』（1922年4月改正）

聴講生の応募資格が、中学校・高等女学校の卒業生またはこれと同等以上の学力があると認められる満19歳以上の男女と規定された。他大学も含め、学則に女性の入学資格が明記された最初のものとなった。



『文部省年報』各年版より作成

【女子聴講生たちの意見・回想】

終始最も痛切に考えさせられましたのは高等学院解放の一事であります。(中略)折角大学の扉が開かれましても、女学校卒業生としては基礎課目の力、殊に数学語学の力が貧弱なのであります。

田代美代子(1921年入学)の意見(『早稲田大学新聞』1923年12月5日付)

早大は、女子学生を入学させたものの、女子に対して何の思いやりもなかった。トイレは勿論ない。昼食を食べるところもない。(中略)昼食は恩賜館の小使さんのところで取り、そこで休ませてもらった。

三瓶孝子(1928年入学)の回想(『ある女の半生』1958年)

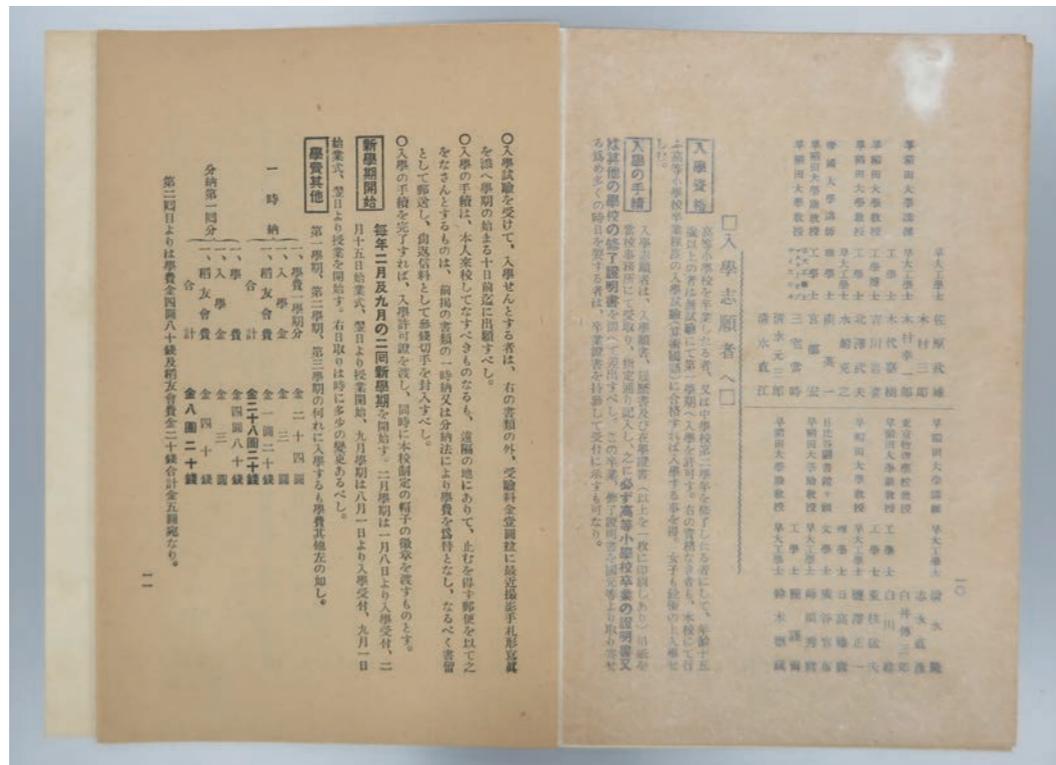
工手学校的女子生徒

早稲田大学附属早稲田工手学校は1911(明治44)年、「各種工業の実務的学術技能を授け」、中等技術者を養成するために設立された。学科は、機械・電工・採鉱冶金・建築・土木の5科で、修業年限は2年半であった。働きながら通学できるように、授業は夜間(18時~21時30分)に開講されていたため、生徒の年齢も職業も様々であった。

入学資格は当初、満14歳以上の男子に限定されていたが、1926(大正15)年9月、「将来この方面に活躍せんとする女性のために工学教育を与える目的」で、試験的に2名の女子生徒を入学させた。入学を希望する女性本人が学校を訪ね、熱心に入学希望を述べたことが、学校当局を動かしたようである。



『早稲田大学新聞』(1926年11月18日)



「早稲田大学附属早稲田工手学校学則」(1931年)
入学資格の欄に、「女子も銓衡の上入学せしむ」との記載がある。



早稲田工手学校建築科の授業風景(1938年)
製図実習の授業。左手前に女子学生たちの姿も見える。

校外生の女子学生

早稲田大学出版部は1922(大正11)年4月、通信講義録『早稲田高等女学講義』(毎月二回発行)を創刊した。内容は国語・歴史・理科・数学・家政・礼法などの講話が中心であった。修業年限は一年半で、優秀な卒業生には大学聴講生への受験資格が与えられた。

『女学の友』は『早稲田高等女学講義』の付録であり、内容は学者の論説から小説・エッセイ、職業解説などバラエティに富んでいた。読者が詩や短歌、投書などを投稿できるコーナーも設けられていた。



『早稲田高等女学講義』: 左上 「早稲田大学校外生之証」: 右上
『女学の友』: 下

3. 学部への正規入学と戦時下での学び

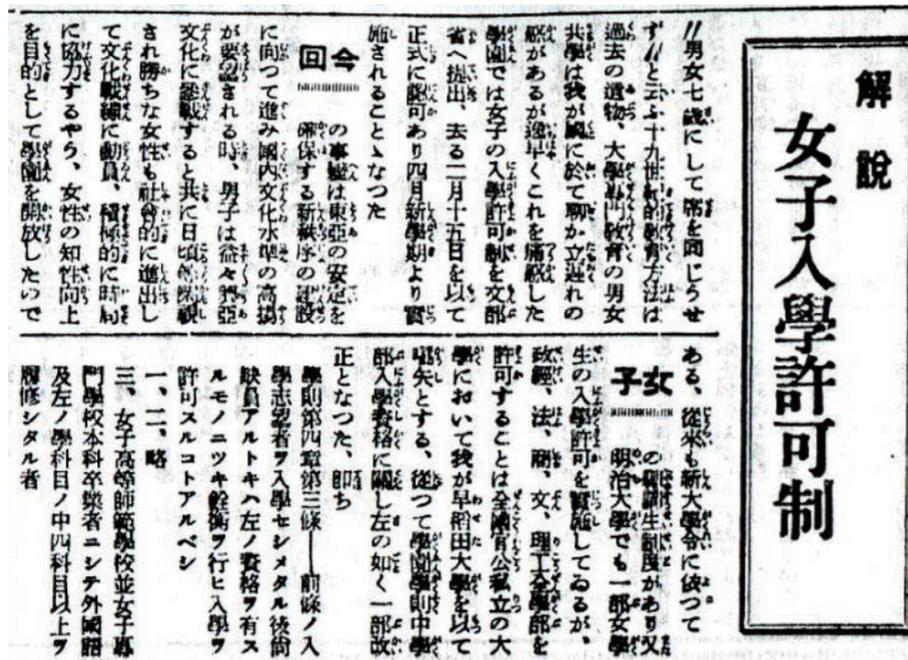
(1939 ~ 45年)

学部への正規入学

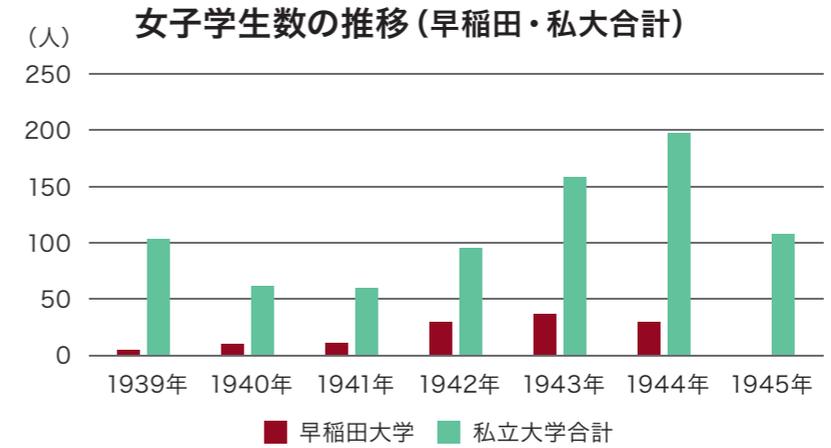
早稲田が女子学生に門戸を開いた1920年代、大正デモクラシーの影響などから、女性への高等教育の開放の機運が高まっていった。1922(大正11)年、全国的な教育者団体である帝国教育会は女子高等教育振興運動を開始し、文部省に陳情するなどの活動を行った。

そのような時代の潮流から、制度的に女性の大学入学を認めていなかった文部省も、個別の大学の事例について認可を出すようになった。その結果、東北帝国大学・同志社大学が、正規学生として女性に門戸を開放し、同様の対応をする大学が徐々に増えていった。

早稲田大学においては、1934(昭和9)年に文学部で男女共学化の動きがみられたが、時期尚早ということで理事会の承認が得られなかった。しかし1938年になると、文部省の教育審議会の審議の方向性や日中戦争開戦後の時局の影響などから、再び女性への門戸開放の動きがみられるようになり、1939年より正規学生として女性の入学を認めることとなった。女性が入学できる学部学科に制限を設ける大学が多い中、全学部で女性に門戸を開放したのは、当時としては画期的なことであった。



女性の入学を報じる『早稲田大学新聞』(1939年3月1日付)



『文部省年報』各年版より作成

【初期の女子学生の回想】

私が最初に早稲田に入ってから、女子大からドーツと早稲田に入学するようになった。いろんな女の方から電話がかかってきて、「どんな試験が出た?」とか「私も入りたいけど……」という問い合わせが毎年ありましたよ。

織本良子(東京女子大学出身/1942年文学部卒)の回想
(『早稲田女子学生の記録』1979年)

時間があれば学生同士ディスカッションをしておりました。私の場合、ですから、男性・女性という意識は特になかった。女性だからという引け目もなければ、バカにされたということもありませんでした。

園田天光光(1942年法学部卒)の回想(同上)

戦時下における女子学生

女子学生たちが入学した頃は、日中戦争からアジア・太平洋戦争に向かう時期であり、大学での学びにも様々な制約が加えられた。男子学生は軍事教練の授業が必修となっており、女子学生は免除されていたものの、そのことを「何だかとてもすまないことだと思」ったという(『早稲田女子学生の記録』)。

戦況が厳しくなっていくと修業年限も短縮されていき、1941年度の卒業は3ヶ月繰り上げとなり、翌42年度からは6ヶ月繰り上げとなった。そして1943年10月、「在学徴集延期臨時特例」公布により、20歳以上の文科系の学生は一斉に陸・海軍に入営・入団することとなった。

女子学生たちは、出征していく男子学生たちを見送る立場となった。大学に残った女子学生たちもまた、勤労働員に徴用されることとなり、勉学を続ける事は困難となった。

【戦時下の女子学生の回想】

(教練の授業で)教官が(女子学生がいると思わずに)名簿を読みながら「渡邊道子ちつとも出て来んじゃないか?」とどなった所、誰かが「それは女であります」と言ったら「女でも何でもよい、ちつとは出て来い!」と言ったというのである。

渡邊道子(1942年法学部卒)の回想(『早稲田学報』第607号、1951年)

勤労働員は男子学生とともに鶴見の日本鋼管であった。職場も皆おのおの違う。(中略)やがて日本鋼管も空襲におそわれるようになった。絶対に大丈夫という鉄の防空壕に避難したのを最後に、私たち女子学生は、その場を引きあげることとなった。

吉田秀子(1946年文学部卒)の回想(『早稲田女子学生の記録』1979年)

学徒出陣を見送る

文学科国文学専攻に在籍していた宇津宮満枝は、在学中に心境をいくつかの歌に詠んでいる。そのうちの一首が1990年に健立された平和祈念碑の裏側に刻まれている。



「数少ない国文の友を戦争に送る会」(1944年)



平和祈念碑(大隈講堂と大隈庭園の間の道沿いにある)とその裏に刻まれた宇津宮満枝(1946年文学部卒)の句

征く人のゆき果てし校庭に音絶えて
木の葉舞うなり黄にかぐやきて

関連年表3

| 西暦 | 和暦 | 月 | 事項 (太字は早稲田大学関連) |
|------|------|----|--|
| 1945 | 昭和20 | 8 | アジア・太平洋戦争終結 |
| 1945 | 〃 | 12 | 「女子教育刷新要綱」が閣議決定され、大学への女性の入学が正式に認められる |
| 1946 | 昭和21 | 4 | 高等師範部 (後の教育学部)、女性の入学を認める |
| 1948 | 昭和23 | 3 | 「早稲田大学女子学部設立に関する建議書」、島田孝一総長に提出される |
| 1948 | 〃 | 4 | 日本女子大学など5女子大学を含む12新制大学の設置が認可される |
| 1949 | 昭和24 | 4 | 新制早稲田大学 (第一・第二政治経済学部、第一・第二法学部、第一・第二文学部、教育学部、第一・第二商学部、第一・第二理工学部) の設置、文部大臣の認可を得る |
| 1962 | 昭和37 | 3 | 第一・第二文学部教授暉峻康隆、『婦人公論』に「女子学生世にはばかり」を发表 (「女子学生亡国論」おこる) |
| 1966 | 昭和41 | 1 | 「学費・学館闘争」おこる |
| 1966 | 〃 | 4 | 第二政治経済学部・第二法学部・第二商学部 ^{に代わる} 夜間4年制の社会科学部設置 |
| 1972 | 昭和47 | 7 | 「勤労婦人福祉法」制定 |
| 1985 | 昭和60 | 6 | 「女子差別撤廃条約」批准により、「男女雇用機会均等法」制定 |
| 1987 | 昭和62 | 4 | 人間科学部設置 |
| 2003 | 平成15 | 4 | スポーツ科学部設置 |
| 2004 | 平成16 | 4 | 国際教養学部設置 |
| 2007 | 平成19 | 4 | 第一文学部・第二文学部を文化構想学部・文学部に再編、理工学部を基幹理工学部・創造理工学部・先進理工学部 ^{に再編} |

4. 戦後の女子学生の増加 (1946～60年)

戦後学制改革

1945 (昭和20) 年12月、「女子教育刷新要綱」が閣議決定され、女性の大学入学が正式に認められた。これにより、翌46年度から女性の入学を認める高等教育機関が多数現れた。早稲田でも、後に教育学部となる高等師範部が、46年度から女性の入学を認めている。

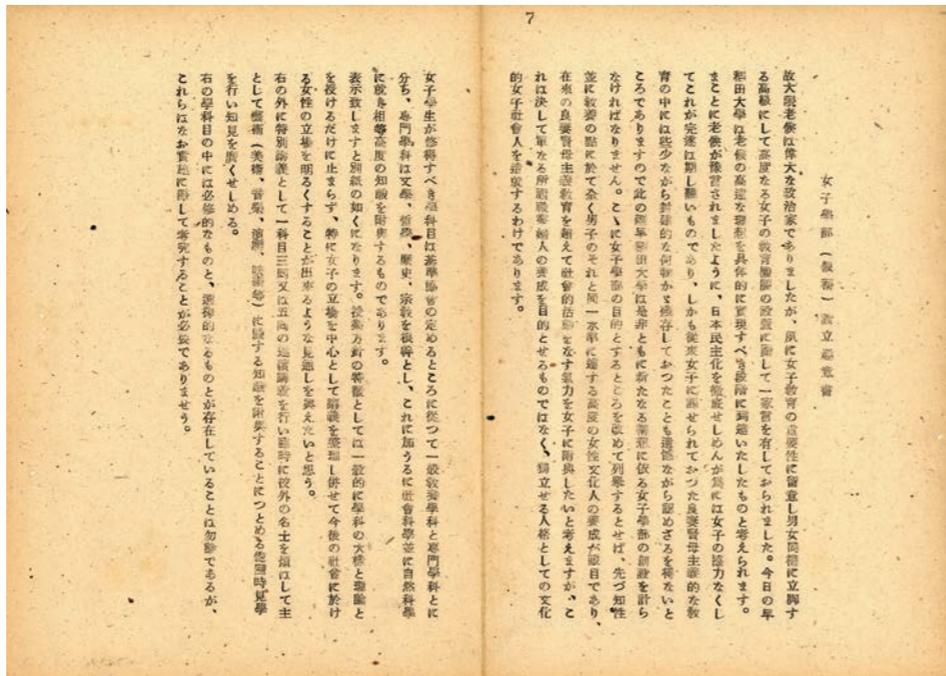
戦後学制改革により、旧制高等教育機関は1949年 (一部の女子大学等は48年) から、新制大学として発足することとなり、各高等教育機関はその準備に追われた。早稲田大学においても、新制大学発足に向けて様々な建議案がなされたが、その中の一つに「女子学部」設立建議案があった。

女性の大学入学が制度上認められたこと、さらに1950年から短期大学制度が創設されたことにより、女子大学生の数は50年以降急速に増えていった。文科系、特に文学部での女子学生の増加が著しく、1960年頃には多くの大学で、文学部における男女の割合が逆転する現象がみられるようになった。

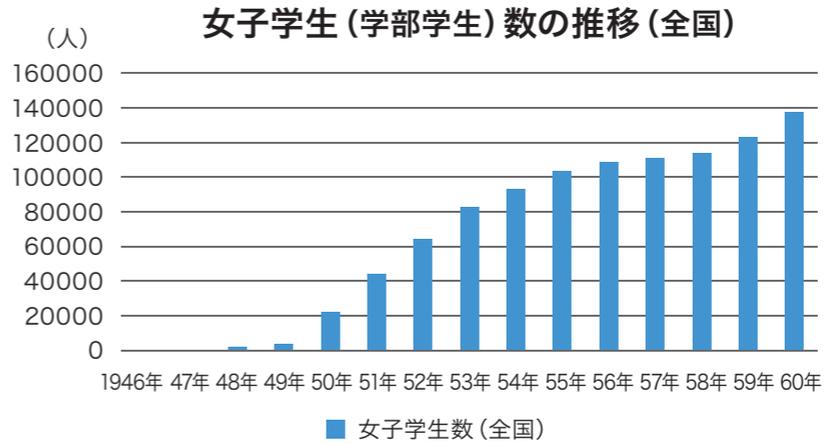
【敗戦直後の女子学生の回想】

一九四六年六月一日、十名の女性が七十名余の男子と共に新設の高等師範部社会教育科に入学した。学制変更を経て、五年後教育学部社会科を卒業したのはその中の三名で、他の人は学業成就する事なく去って行った。(中略) 預金封鎖と凄じいインフレで、生活と学業を支えるために必死にならざるを得なかった。

小安^{よさ}総 (1951年教育学部卒) の回想
 (『早稲田学報』第1054号、1995年)



「女子学部 (仮称) 設立趣意書」(1948年)



文部省『学校基本調査報告書』各年度版より作成

早稲田大学 学部別女子卒業生数

| | 政経 | 法 | 文 | 教育 | 商 | 理工 | 計 | 卒業生総数 |
|-----|----|-----|------|-----|----|----|------|-------|
| 46年 | | | 10 | | | | 10 | 1154 |
| 47年 | 1 | | 1 | | | | 2 | 2936 |
| 48年 | | | 3 | | | | 3 | 1341 |
| 49年 | | | 4 | | | | 4 | 1312 |
| 50年 | 1 | | 15 | | | | 16 | 1690 |
| 51年 | | 8 | 53 | 7 | | | 68 | 3057 |
| 52年 | 1 | 3 | 51 | 12 | | 1 | 68 | 4048 |
| 53年 | | 1 | 45 | 30 | | 3 | 79 | 5626 |
| 54年 | 4 | 11 | 99 | 25 | 3 | 5 | 147 | 5258 |
| 55年 | 5 | 16 | 178 | 54 | 10 | 7 | 270 | 5799 |
| 56年 | 6 | 12 | 177 | 89 | 8 | 9 | 301 | 6225 |
| 57年 | 11 | 13 | 179 | 80 | 10 | 5 | 298 | 6426 |
| 58年 | 9 | 13 | 202 | 89 | 14 | 7 | 334 | 6431 |
| 59年 | 18 | 11 | 212 | 107 | 4 | 5 | 357 | 6603 |
| 60年 | 21 | 19 | 215 | 95 | 5 | 4 | 359 | 6931 |
| 計 | 77 | 107 | 1444 | 588 | 54 | 46 | 2316 | 56404 |

『早稲田学報』第850号 (1975年) 掲載の表より作成
※人数は旧制大学、第一・第二学部の合計

【文学部の女子学生の回想】



『早稲田大学新聞』1947年2月21日付

私が入った露文科の女子は一割、クラスは四十人くらいで、女子は四人でした。(中略)私が入ったとき、後から入ってきた一年生を見て、「すいぶん女子学生が増えたな」という感じがしました。このころからぐんぐん増えてきたという感じです。

関千恵子 (1954年第一文学部卒) の回想
 (『早稲田学報』第1084号、1998年)

5. 「女子学生亡国論」を超えて (1960年代)

「女子学生亡国論」と女子学生たちの反論

1962(昭和37)年3月、第一・第二文学部教授の暉峻康隆が、『婦人公論』誌上に「女子学生世にはばかる」を^{てるおか}発表した。その翌月には慶應義塾大学文学部教授の池田弥三郎が同誌に「大学女禍論」を発表し、これらを契機として「女子学生亡国論」が世間をにぎわせた。暉峻らの主張は、私立大学の文学部は花嫁学校と化している、将来就職するわけでもなく、ただ「花嫁道具」として教養と学歴を身に付けるためだけに大学に来ている、などというものであった。

私が右のタイトルでエッセイを発表した当時、早大へ進学する女性の大半は文学部に集中し、当時行われていた口頭試問で、「早稲田ぐらい出ていないと、まともな嫁入り口はないよ」と母さんに言われましたので、といった類いの答えが多かったので、これでは文学部は花嫁学校となってしまうと心配したからであった。慶應義塾大学の故・池田弥三郎君も同病相憐れむで、前後して同趣旨のエッセイを書いたものである。「女子学生亡国論」とは、当時の週刊誌が勝手に付けたタイトルが独り歩きしたものであった。

暉峻康隆「女子学生の皆さん」(『早稲田学報』第1084号、1998年)

これに対して、批判を受けた女子学生・卒業生たちからは様々な声が寄せられた。女子学生の存在が認められただけで大きな進歩とする声、目的意識のない者は男子学生の中にもいるとする声もあった。

この時期の女子学生の就職について、1960～64年の統計をみると、卒業生のうち就職を希望する者の割合は年々高くなっているものの、実際に就職した者は約半数にとどまっていたことがわかる。

【女子学生批判を受けて】

近頃とみに女子学生批判が盛んである。私はこの現象を女子学生のために大変よろこばしいことであると思っている。かつて私が在籍したころ、女子学生の数は一にぎり、一にぎりの女子学生が声を大にして叫ぼうとその存在すら認めてもらえなかった。まして就職の時期が来ようと、雇用側の態度は女子学生に対して非協力的すぎる。

西沢裕子(1951年第二文学部卒)の意見(『早稲田学報』第758号、1966年)

はっきりした目的意識を持たない女子学生は、自己の発展変革という要求が弱いために、容易に転落の道を歩むことができる、というところに、例の悪名高き“女子学生亡国論”が生まれてくる原因があるのではないかと考えます。しかしこれはまことに片手落ちな論理であって、学生という自己探求の特権を自ら放棄しているのは、一部の女性のみならず、一部の男性また然りなのです。

野口絢子(1967年第一文学部卒)の意見(『早稲田学報』第772号、1967年)

早稲田大学 女子卒業生数・就職希望者数・就職者数

| | 1960年度 | 1961年度 | 1962年度 | 1963年度 | 1964年度 |
|------|--------|--------|--------|--------|--------|
| 卒業生数 | 359 | 387 | 464 | 536 | 615 |
| 希望者数 | 215 | 338 | 417 | 495 | 604 |
| 就職者数 | 167 | 210 | 220 | 301 | 290 |

※『早稲田学報』第758号(1966年)掲載の表より作成

6. 学生生活の様子 (1960～90年代)

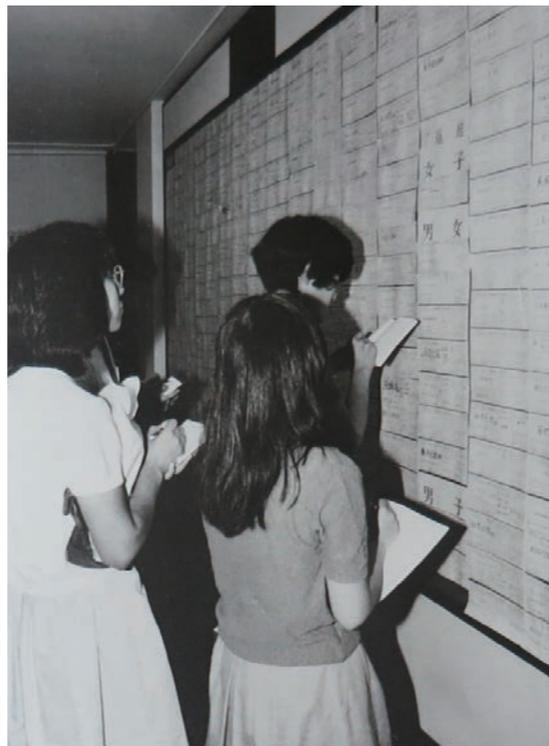
通学風景



高田馬場駅前から早大正門行きのバスに乗り込む。この当時はまだバス代が大人60円であった。

『都の西北(学部統一アルバム)』(1978年)

就職活動



就職課の掲示板で行きたい企業の情報を得る。この当時はまだ男子のみ、女子のみの採用枠が存在した。

『早稲田大学卒業アルバム』(1984年)

7. 女子学生たちの今

現在の女子学生数

2021年のデータによると、早稲田大学全学部合計で14,619人の女子学生が在籍している。これは日本大学に次いで、国内で2番目に多い人数である。女子学生の割合をみると、文系は多く、理系は少ない傾向は続いているものの、その人数・割合ともに高くなっている。

早稲田大学学部学生数(2021年5月1日現在)

| 学部 | 男子 | 女子 | 女子学生割合(%) |
|-------|-------|-------|-----------|
| 政治経済 | 2554 | 1316 | 34.0 |
| 法 | 1966 | 1186 | 37.6 |
| 文化構想 | 1618 | 2108 | 56.6 |
| 文 | 1361 | 1481 | 52.1 |
| 教育 | 2599 | 1469 | 36.1 |
| 商 | 2580 | 1252 | 32.7 |
| 基幹理工 | 2100 | 419 | 16.6 |
| 創造理工 | 1873 | 582 | 23.7 |
| 先進理工 | 1643 | 589 | 26.4 |
| 社会科 | 1845 | 842 | 31.3 |
| 人間科 | 1750 | 1356 | 43.7 |
| スポーツ科 | 1154 | 519 | 31.0 |
| 国際教養 | 1023 | 1500 | 59.5 |
| 計 | 24066 | 14619 | 37.8 |

※早稲田大学HP「数値で見る早稲田大学」より作成

早稲田の女子学生支援

早稲田大学では2008年に「早稲田大学男女共同参画基本計画」を策定し、その中で女子学生を対象とする女性の研究職へのキャリア支援の充実、特に、理工系の女子学生に対するキャリア支援を行なうことを宣言した。また、2012年度に発足したWaseda Vision 150「男女共同参画・ダイバーシティの推進プロジェクト」においては、学生・教職員の女性比率、外国人比率など数値目標として掲げ、その目標達成に向け実行計画を遂行している。

また、早稲田大学唯一の女性の校友会である稲門女性ネットワークでは、1995年より奨学金の贈呈やキャリア支援など、後輩女子学生への支援活動を行なっている。



早稲田大学卒業アルバム (1984年)

2022年 4月23日発行

発行者 早稲田大学歴史館

〒169-8050 東京都新宿区西早稲田1-6-1 早稲田大学 早稲田キャンパス1号館1階
TEL: 03-6380-2891 / Email: reki@list.waseda.jp
(東伏見アーカイブズ)

〒202-0021 東京都西東京市東伏見3-4-1 東伏見STEP22
TEL: 03-451-1343 / FAX: 042-451-1347
URL <https://www.waseda.jp/culture/archives/>

※本図録に掲載した写真・資料は、展示会場に陳列したものの一部です。

※所蔵先が記されていない展示資料は、早稲田大学歴史館(東伏見アーカイブズ)所蔵です。

表紙: 1934年、1956年、1978年、1981年の卒業アルバムより